

論 文 要 旨

Saliva Amylase as a Measure of Sympathetic Change Elicited by Autogenic Training in Patients with Functional Somatic Syndromes

(交感神経機能変化の指標としての唾液アミラーゼの有用性:機能性身体症候群患者に対する自律訓練法による検討)

関西医科大学心療内科学講座
(指導:福永幹彦教授)

木場律志

【研究目的】

過敏性腸症候群や機能性ディスぺプシアなどの機能性疾患は、共通する病態を有しているとされる。このような病態は、機能性身体症候群 (functional somatic syndrome ; FSS) と呼ばれており、「一貫して説明可能な器質的異常よりも、症状、苦痛、障害によってより特徴づけられる一連の疾患群」と定義される。FSS 患者は医療機関での検査や治療を繰り返し受けるため、その結果として生じる患者自身や保険制度への負担は大きい。しかし、FSS の病態の詳細については不明な点が多く、より適切な病態把握と治療方法の確立が求められている。

FSS では、自律神経機能の異常が認められることが分かっている。また、FSS の病態には、抑うつや不安、自己の感情の気づきや表現に乏しい傾向、身体感覚への気づきに乏しい傾向といった心理的因子も関与するとされている。つまり、FSS の病態を検討するにあたっては、客観的評価、主観的評価、心理的評価といった複数の側面から評価していくことが求められる。

自律訓練法 (autogenic training ; AT) は、交感神経活動の抑制、末梢の皮膚温の上昇、不安や抑うつに関与する身体症状の軽減などの効果を有する治療法であり、過敏性腸症候群や緊張型頭痛などの FSS の各疾患の身体症状を改善させることが示されている。

FSS の自律神経機能を測定する方法として、心拍変動や表面筋電図などの精神生理学的評価に加え、バイオマーカーによる評価の必要性も指摘されてきている。交感神経系の生化学指標である唾液アミラーゼは、応答時間が1～数分と短く、FSS に関するストレス研究で頻用されるコルチゾールに比べてレスポンスが速いとされており、即時性、簡便性、非侵襲性といった利点を有する。

そこで本研究では、FSS 患者における AT の効果について、唾液アミラーゼ、指尖皮膚温、主観的症候スコア、心理検査を用いて評価し、FSS 患者における交感神経機能変化をとらえる指標としての唾液アミラーゼの有用性について検討した。

【研究方法】

2012年7月から2013年8月にかけて当科にて初めて AT による治療を行った FSS 患者 20 名 (男性 7 名、女性 13 名、平均年齢 40.50±13.57 歳) と、健常コントロール 23 名 (男性 10 名、女性 13 名、平均年齢 37.83±10.87 歳) を対象とし、AT 前後の唾液アミラーゼ、指尖皮膚温、自覚的症候スコアの測定と、心理検査 (気分調査票、不安・抑うつ尺度、身体感覚増幅度尺度、アレキシサイミアスケール) を行った。

【結果】

FSS 患者のベースラインの唾液アミラーゼ値は健常コントロールに比べ有意に高かった。しかし、AT 後においては両群間に有意差は認められなかった。指尖皮膚温は両群とも AT 後に有意な上昇を認めた。また、AT は FSS 患者の身体症状の改善に寄与した。心理指標の結果から、不安や抑うつのような気分状態、身体感覚の増幅、アレキシサイミア傾向が FSS の病態に密接に関与していることが示された。

【考察】

安静時の唾液アミラーゼ値の高値に反映される交感神経の過緊張状態は FSS の病態に関与していると考えられた。また AT は FSS 患者における自律神経機能の異常の改善に寄与することが示された。本研究より、唾液アミラーゼは FSS 患者における AT による交感神経の変化の指標として有用であることが示された。